

美紗の会

たより

新しき年の願い

西松 布咏



2016年 謹賀新年

新しき年は
江戸の女に還って
無限の天空に唄いたい

「新しき年は江戸の女に還って無限の天空に唄いたい」。

昨年末の第五十回記念演奏会に初披露の屏風を背景にした年賀状に言葉を添えて年末に投函した。いつもは三味線を弾いている我が姿を恒例としていたが今年は屏風の遊女に想いを託した。

作者は岐阜の駄知に住む九十歳になる陶芸家の安藤實氏。一昨年の夏お願いすると即座に三味線を弾く私の姿が映えるようにと余白を広くし遠慮がちに描いて下さったがその筆先は天意無朴だった。

自由に天空を舞い、三味線の遊女は振り向いて背後で語りかけてくる。

昨年は母の入院やら声を突然喪うやらで波乱の年

だったので新しき年は唯一無心に唄ってゆきたいと先生にも年賀状をお出しした三十日の夜に訃報が届いた。

あまりに突然のご逝去に新年を迎えた今も受け止められないでいる。

一昨年に逝去された相谷さんがお連れ下さった暁山窯の髷もじゃ先生のお人柄にひかれ爾來岐阜出張の帰りにお酒ではなくお茶のみ話を伺うのが楽しかった。ゴミの山のようなアトリエに立ち寄ると私がちよつとほめた香合や古そうな白磁の茶碗を「いいよ持ってゆきんさい」と、いとも簡単に下さった。撥を持つても撥はあたらず」と撥を踏んでいる黒猫をさらさらと色紙に描いて下さったり「万世不易」と力強い筆さばきで人生教訓を一枚とまさに浮世離れた無欲の仙人のようで、いつかは私もそうありたい：とあこがれの心の師であった。

しばらく私が不調で葉書のお返事を出さなかった時には電話のみならず前号の「たより」（星逢う夜の顛末記）を読まれて「七転八起」と墨の字も鮮やかに「星逢う夜いいですね。声は出なくても岩をも通す一念。若い時は若い時。年はとっても生きていながら大丈夫。私も画、書、陶、とやって来ましたがなあに若い時は若い。しかし老いてしかやれぬことがあると思います。小生も間もなく九十歳になりますが向こうが私を九十にしたいだけで私は私。知らぬ顔の半兵衛を決めております。弱気は禁物。」と元気の無い私に励ましのお手紙を下された。

私がすっかり元気になった昨年の秋にお会いした時「部屋の掃除をしたら美紗の会たよりが出て来て懐かしかったよ。春の夜の闇はあやなしの文章を読んだんと春の夜を感じましたよ。」などと仰って別れ際になんとご自分がお若い時に織部窯から堀り出したという花器を下された。そばに居た友人が「先

生！これは国宝ものですよ！」とビックリしていると「良いものが解るひとにあげたいんじやよ」と無造作に新聞紙に包んで下さった。

まさかこれが形見分けになるとも知らず帰宅するなり我が部屋の古い茶筆筒の上に飾った。既に部屋のあちこちに先生の天目茶碗やどつしりとした壺や河童の置物が点在しているが、作品の原点である黒織部はひととき異彩を放った。その日から毎日嬌めつ眇めつしているが何とも言えぬその存在に圧倒されながら先生との時間を懐かしんでいた。

でも：もうこの世に先生はいらっしゃらない。

唯一の慰めは大好きなお風呂で眠るようにあの世に旅立たれたとか：きつと今頃は浮世から解き放たれて屏風の遊女のように自由自在に天空を舞われているのだと思う。

三味線を持つ江戸の女に還ってもう一度「良い声じゃのう：」と言っていたきたい。
新しき年の願いである。



だるまさんがころんだ

長田 紀久子

美紗の会五十回記念演奏会、三番目の出し物「棚のだるま」の三味線で、大コケした長田です。

そんな哀しい状況に、何故自ら飛び込んでしまったのか。これからそこに至った道筋をお話ししようと思います。

そもそも生まれて半世紀以上、いわゆる「邦楽」については全く縁もゆかりも関心もなく過ごしてきました。すっかりテレビに邦楽らしきものが映りてもしよものなら、何も考えず反射的にチャンネルをかえるような人間だったのです。

ところが、歌は大好きで、音楽部に所属し、コーラスもやっていました。コンサートやライブには目がなく、先生に恵まれて、シャンソンのレッスンはずっと続けていました。日本の歌である「邦楽」だけが、まるで違う次元のものであるかのように、アンテナに引っかからなかったのです。

その状況が変わったのは、まことにひょんなことからでした。

「自校史教育」という言葉をご存じの方は少ないと思うのですが、実は十年ほど前、この教育法を提唱し、学校の現場に広めようと活動しておられた寺崎昌男という方にお会いし、親しくお話を伺う機会に恵まれたのです。それが発端でした。

「序列化された日本の学校には、本当はこんな学校には来なくなかった」という不本意入学者が多い。そういう学生・生徒に、不本意ながらも在籍している学校の歴史を、良いことも悪いことも丸ごとレクチャーすると、それがどのような学校であっても、勉学態度が前向きになり、成績も上がる傾向がみ

れる」というのがお話の骨子でしたが、どのような心の動きで、そういうことになるのか、その場ではいまひとつ腑に落ちませんでした。しかし、お話を聞くうち、寺崎教授のお人柄の温かさが徐々に身に沁み、「自校史教育」という概念も、いつの間にか私自身の中に深く沈潜していったのです。



一月もたったころでしようか、ある日突然こう思いました。私は「不本意日本人」だったと。

中学の社会の先生が、日本の近現代史は時間がないのでやりませんと言っていた場面が甦りました。日本史はつまらなく、高校では日本史を選択しませんでした。子供から大人になる過程で見ていたテレビ番組・映画は、多くがアメリカ力もので、理想の生活は、欧米にあると思っていました。

自分では普通に育った日本人のつもりでしたが、私のアイデンティティの形成には、決定的な欠陥があったのです。生まれ育った場所の歴史と文化に対する否定的な思い込みがそれです。

「不本意入学者」という言葉が、私の中の「不本意日本人」に重なり、あぶりだされた瞬間でした。そのことが分かっても、特に何が変わったという

こともありませんでしたが、ネットで「本当の日本史」的な動画を探しては楽しむようになり、歌については、シャンソンに全く興味がなくなり、何か「邦楽」をやりたいなあと思うようになっていました。

最近始めた邦楽遍歴については、話が長くなりまですので省略しますが、実は布詠師に巡り合うまでは、一通りどういうものかわかったら、音楽の趣味はすっぱり止めてもいいかなあと思っていたのです。

家でも、(役に立たない)お稽古は止めて、(皆が喜ぶ)庭の手入れや野菜作りを趣味にしたらと言われていましたし、垣間見た邦楽の世界にそれほど魅力は感じませんでしたから。

何を検索していた時だったか忘れましたが、布詠師の動画がたまたまヒットした時は衝撃でした。

「アッ! 私のお師匠さんはここにいらした!」と思いました。優しい気な佇まいの中にあって、真摯な声が耳を打ちました。三味の音は、その声と絡み合い、なつかしく、息づく空間を形作っていました。

そういうわけで、私のやる気は復活し、だるまさんを転がすに至った次第です。

当分ご迷惑をお掛けすることと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

花と根

川崎 隆章

「歌は世につれ、世は歌につれ」という言葉があります。しかし世は歌に連れてはいません。世はいまだ歌の理想から程遠く、特に二〇一五年は歌も枯れ果てたのかというほど、とがった言葉ばかり飛び交う味気ない年となりました。

そんな最中に、美紗の会のつどいが第五十回を迎えました。いつものように暖かい雰囲気の中、自分

の生まれ年よりもはるか昔に作られた歌が唄われ、まるで絶海の楽園のように浮かんでいました。

事情あってしばらく休会したままですが、私が布唄師匠のもとに入門したのは、ちょうど世紀の変わり目あたり。まさに女子会員が優勢だったんだなという時代に入りました。

入門当時、男子会員は大先輩と若造組の二種類でしたが、ちよつと兄貴の伊勢さんや私などは「アレワイサ・ブラザーズ」などと自称し、なんだかアチャラかなことばかりやらせていただいていたような気がします。先日の方の懇親会では司会を仕りまして、ポーランドからメールで送られてくる伊勢さんのメッセージをご紹介しましたが、いつもあんなやりとり「ばかり」していました。度胸と大声だけが頼りの三十代の小僧ツ子でした。

兄弟子たちは総じて紳士的な方ばかりで、身なりといい心意気といい仕草といい、大事なお手本となっています。

姉弟子たちは、今にも増して男勝りな方が多いという印象です。大事なお手本になりました(笑)。

美紗の会の様式美や行事での手際の良さは、普段のキビキビとした生き方の反映なんだろうと思います。三十代の新入り会員には眩く見えたものです。

一時、小さな録音機を担いで師匠の演奏を追いかけたことがあります。邦楽録音の勉強を兼ね、記録者の立場でお供をしたという次第です。いろんな演奏会についてゆきました。本番直前に皮が破れて(大きな音でした)、やむを得ず破れたままの中棹で文楽人形と共演したのが一番強烈な思い出です。力を籠めれば演奏の終わりまで皮が持たない、しかし緩めれば演奏が成り立たない…そんな駆け引きの中でおこなわれた命懸けの演奏に、心がかたつぽになってしまったのを覚えています。

先日の美紗の会で、久々に布唄師匠の唄を聞きながら、師匠の唄が、受け継がれた歌と、積み上げてこられた芸、そしてそれを支える聞き手の想いを根として咲いているものだと改めて思いました。懇親会の司会者をしながら、会場一面に広がる人々の姿が、まるで師匠の唄につながる太く、広く、密集した根つこのように思えました。

この世がどんなに荒んでも、この「根」があるうちは大丈夫です。地上を飛び交う言葉が、どんなに咲こうが枯れようが乱れようが整然としようが、根っこは日々、機嫌よく、力を吸い上げて、立派な花を咲かせるのです。

入門した時は、花にばかり眼がいつていたように思います。どんなに立派で見栄えのする花を咲かせるか、そこにばかり目も気も遣っていたように思います。

しかし、思えば兄弟子、姉弟子たちは、日々の暮らしや人生の気概といった自分の「根っこ」を大事に育て、その結果として毎回、それぞれの立派な花を咲かせておられるのです。何かの時(誰かが何の気なしに)「うまい人と下手な人がいる」というような事を言った時、布唄師匠が「うちのお弟子さんのことを下手だなんて言わせないわよ。一人一人の唄なんだから」と、静かな声で憤っておられたのを思い出します。

一人一人の唄も、それぞれの根から育った花なのだ、と、ようやく分かってきたように思います。

根無し草のような言葉が飛び交う時代。今、一番大事にしなければいけない生き方を学んでいます。

「薊の会」閉会によせて

鶴間 茂登子

昨年の八月二十三日の早朝、薊の会最後の日を迎えて緊張感はいつもより格段に高まっていました。演奏が終盤を迎える頃には、私の頭の中を次々と懐かしい思い出のシーンが走馬灯の如く駆け巡っていき、そして次第に寂しい思いに変わっていききました。薊の会は平成二十年九月、軽井沢の山荘の完成パーティーの祝いの場にてスタートしました。

第一回は「唄と語りの夕べ」と題し、布唄師匠による地唄「ゆき」の演奏と寺田農さんの谷崎潤一郎「月と狂言師」の朗読の共演はとても感動的でした。この日お招きしたお客様の中には邦楽を身近で初めてお聞きになる方も多く、諦念し切れない思いに揺れ



る遊女の心情を切々と唄う「ゆき」に心引き付けられ会場には静寂が訪れました。その後、薊の会のファンになって下さり、毎年、薊の会を楽しみにしていますとおっしゃって頂いた方や初めて邦楽をお聞きになるというお友達をお誘い頂いたり、遠路より軽井沢までお越し頂きました。

七回の薊の会のすべてに懐かしい思い出がございますが、その中でも特に印象深いコラボレーションがございます。

第二回の「ファドの孤愁・江戸唄の夢」ではポルトガルのファドと日本の江戸唄の共演でしたが、主人が生前とても好きでしたファドの唄を演奏中、突然、雷雨に見舞われましたが香川有美さんの歌声は激しい雨音にも決して負けることのない迫力でした。標高の高い軽井沢ではよくある夏の自然現象ですが、まるで主人が共鳴しているかのようで、とても思い出深く心に残っています。

また、第三回「月に憑かれて・魅せられて」では、月に思いを寄せて様々な月の姿を鑑賞して頂きました。アルベール・ジローの「月に憑かれたピエロ」から寺田農さんによる詩の朗読と布詠師匠の唄と三味線、小林静純さんによる尺八演奏でした。西洋の詩の世界と日本の伝統音楽との異色な共演でした。尺八のワークシヨップも行われ尺八に触れ、音出しの難しさをみんなで体験しました。第六回は「幽玄と粋」の世界、観世流能楽師佐久間二郎さんの謡と仕舞による能「高砂」と布詠師匠の端唄「高砂」の唄と三味線による聞き比べを行いました。また、布詠師匠が富本節「松風」で愛しい人との別れと苦しみを嘆き唄い、哀れな松風の亡霊を佐久間二郎さんが舞われました。本格的な能装束を付けての近距離での鑑賞は感動深く本当に贅沢なひと時でした。佐久間さんの能楽ワークシヨップでも大いに盛り上がり



りました。丁寧でわかりやすい解説に加え、能面を身近で見たり手に取ったりして能楽にとっても興味が深まったのではないかと思います。

そして、最後の薊の会では沖縄から演奏者をお迎えしました。「江戸の風・沖縄の風」、布詠師匠が谷川俊太郎さんの詩に曲を付けて唄う「九月のうた」では三味線音楽の新しい世界を鑑賞し、ShinBowさんの沖縄民謡ではブルースの如く、ロックの如くあまり経験することのない独特な沖縄の唄の世界を堪能しました。会場では江戸と沖縄の自由な風を呼び起した事と思います。

いずれの会も心に残る思い出深い演奏として記憶に残っております。薊の会を通じているんな方との素敵な出会いもございました。

多くの演奏者のご厚意とお客様のみなさまに支えられたお蔭で続けられる事が出来ました。本当に感謝

謝申し上げます。特に七回までのすべてに私の我儘なお願いを快くお引き受け頂いた布詠師匠のご協力があればこそ続いた薊の会でした。本当にありがとうございます。また、薊の会の裏方として長い間支えてくださった主人の仕事仲間であった撮影の小関さんに感謝申し上げます。

薊の会は一旦、閉会させて頂きますが、また、皆様と楽しく集える場所として、何かがご提案できたらと願うようになりました。この願いは叶うかどうか分かりませんが、実現の折にはまた、皆様とお会い出来ればと思っております。宜しくお願い申し上げます。

《今後の予定》

◎二月十四日(日)午後三時より

岐阜 かわらや大広間

第十七回 粋艶会のつどい

一門の演奏会と親睦の宴

◎四月二十三日(土)十二時半より

赤坂クラブ

第五十一回 美紗の会のつどい

一門の演奏会と親睦の宴

■たより 第82号

発行者 美紗の会

編集責任者 大久保 朋子

デザイン 近藤 幹則

■美紗の会

主宰 西松 布詠

稽古場 港区白金台三ー二ー二

白金台プレイス三階

電話 (三三三) 二七二六

(五五五) 二四二二

E-mail: nfu@soleil.ocn.ne.jp

URL: <http://www.misanokai.com/>



●お知らせ ホームページのURLが右記に変わりました